



TITLE:

綜説(東南アジアの医学的諸問題)
(シンポジウム総合討議)(<特集>東
南アジア医学シンポジウム特集号)

AUTHOR(S):

白羽, 弥右衛門

CITATION:

白羽, 弥右衛門. 綜説(東南アジアの医学的諸問題)(シンポジウム総合討議)(<特集>東南アジア医学シンポジウム特集号). 東南アジア研究 1967, 4(4): 720-720

ISSUE DATE:

1967-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55261>

RIGHT:

東南アジアの医学的諸問題

綜 説

座長 白羽弥右衛門（大阪市立大学医学部）

本日の総合討議の座長を命ぜられたが、私自身は、東南アジアのうちセイロンをおもにして約70日間回り、8月の末に帰ったばかりで、わずかな知識の持ち合わせしかない。したがって、きょうのような大きな総合討議の座長をお引き受けさせていただく資格のないものと思う。しかし、「進行係がぜひ必要で、おまえはいちおうすわっておれ」という申し入れなので、あえてお引き受けした次第である。

本日、私のアドバイザーということで、5人の方にお並びいただいた。いずれも各専門領域において、立派な業績をもたれ、単に東南アジア問題のみならず、世界的な業績のある学者の方々ばかりである。私は、ただ時計にかわる役ということで、つとめさせていただきたい。

昨日、専門領域の討議が行なわれ、おもに、東南アジアにおける4つの感染症についてご討議をいただいた。また本日は、感染症以外の疾患についてもお話があった。また東南アジアでは、熱帯地域の感染症だけが問題になる時期をすぎて、わが国におけると同じような成人病の問題も、次第に台頭しつつある地域もある。それを第5部として少し話題にのせていただきたい。第6部としては、われわれが研究をする面においても、また医療協力をする面においても、何かの組織的な機関が必要である。さいわいにも、OTCAをはじめそういう組織があるので、その方面について

最後に話題にのせていただきたい。ことに、われわれ医学に関係する研究者、あるいは医療にたずさわる医師の立場からいって、東南アジアにおける研究についても医療協力の面においても、単に give だけでなしに take する面があり、皆さんにそれぞれご希望があらうかと思う。組織の側へいろいろご注文をつけていただければ、おのずから本日の集まりの結論とか、希望とかが出てくるであろう。

最初に京都大学の東教授から、東南アジアにおけるウイルス問題の座長報告ならびにその追加、補遺というようなことで、お話をいただくことにしたい。なお、長い間タイ国でウイルスの研究をしておられた大阪大学微生物病研究所の伊藤博士が帰られたので、ご追加のかたちでお話をいただきたい。

ウ イ ル ス

東 昇（京都大学ウイルス研究所）：私の担当したのは、東南アジアにおけるウイルス性の疾患で、昨日、神戸大学の堀田教授、予防衛生研究所の北岡博士、それから京都大学から私、その3人の話があった。どういうことが現在問題になっているかを、きのうの討議の結果から報告する。

堀田教授の報告によると、神戸大学の医学部では、1964年インドネシアを中心にした医療班を編成しており、本年も堀田教授が引率、現地に赴かれている。その際の方針としては、現地の診療と同時に現地の人たちの血清を分離して持ち帰り、デング熱、日本脳炎、黄熱の3つのいわゆる熱帯性のウイルス病を中心に、抗体分布を調査するという仕事を毎年続